慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	空間の問題 : カント及びコエンの理解
Sub Title	
Author	高橋, 文雄(Takahashi, Fumio)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1927
Jtitle	哲學 No.2 (1927. 7) ,p.1- 32
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000002-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

空間の問題

―カント及びコエンの理解―

高橋文雄

表現的空間と概念的空間

由來認識の働に關して二つの傾向が對立して居る。一つは直觀的であり、他は概念的である。カントに依れば直觀とは「對象の直接の表象」(Kant, Kritik der reinen Vernunft, II. Aufl., S. 41)である。從つて直觀的認識とは物の直接の表象的認識であつて、其の認識が表象に止まる限り認識せられた物とは表象としての物であると云ふことになる。然るに又表象とは、ヴントに依れば、感覺を要素とし、それが全體に若しくは部分的に複合せられた心的形象である(Wundt, Grundriss der Psychologie,

III. Aufl., S. 110)。この表象に於て其の要素が任意に置換せらる可き順序に於て結合せられた場合には、ヴントは之れを內包的表象 intensive Vorstellung とし、之等の要素が任意に置換せらる可き順序に於て結合せられざる場合即ち順序が確立せる場合、これが結合せられて生ずる形象を空間的(外延的)表象 räumliche (extensive) Vorstellung と名づけたが、空間が直觀的表象として認識せられた場合其の表象の要素を成す感覺は或は視覺として或は觸覺として或は筋覺として夫れ等の結合が空間的表象を形成するに當つては、其の順序は任意に置換せられざるものとして正に外延的表象でなければならない。夫れ故に空間の直觀はヴントの所謂外延的表象として視感覺が全體的或は部分的に結合せられた場合には視覺的空間として表象せられ、それと同樣に又觸覺的空間、筋覺的空間等が表象せられる。而して此等が凡て共に表現的空間なる名の下に綜括せられるとすれば、この表現的空間は明かに心理學の對象としての空間として一般には感覺或は表現の一種の枠の如き用を爲す有限的空間と考へられて居る。斯かる空間が感覺の結合であり、從つて異質的であり、單なる直觀的表象であつて而も有限的である限り、我々は其れ

より同質性Homogenität等方性Isotropie或は無限性等の性質を見出すことは出來ないであらう。夫れ故に我々は斯かる空間の性質を見出す爲めに、最早心理學の對象としての表現的空間に止まることを放棄して數學に往き、正に之れを幾何學的空間に於て求めねばならない。既にカントも言つて居る樣に、數學は「對象を先天的に認識すべき理論的理性認識」である(Kant, Kritik d. r. Vernunft, Vorrede zur II. Aufl., S. X)。從つて此の領域に於ては最早認識の Aposteriorität は問題とせられずして其の Apriorität のみが問題となる。心理的事實の問題に非ずして論理的價値の問題である。夫れ故に數學の對象とする空間も表現的空間の如きものではなくして、Apriorität を有する概念的空間である。先天的にのみ思惟せられる可き空間である。而して思惟そのものがイデーへの認識の働として考へられる限り、思惟せられる可き空間なるものは、Apriorität を有するものとして Aposteriorität に止まる表現的空間の根柢に在つて其れを可能ならしめる處の極限としての空間であり、イデーとしての空間でなければならない。概念的空間が表現的空間の極限であり、イデーである限り、又其れは表現的空間の有せざる同質性、等方性、無限性等

の先天的性質をも有し得るものである。

カントが先驗的感性論に於て幾何學の基礎付けを問題とせるに際して其處に於て取り扱つた空間も正に概念的空間としての幾何學的空間であつた。然し乍らカントが先驗的感性論に於て空間を純粹直觀として究明したことに由つて、彼が取り扱つた空間を直ちに心理學の對象としての空間と看做すのは、恐られ觀者が彼の使用した直觀なる表語に捕はれ又先天的 apriori を生得的 angeboren と誤解せる結果であるだらう。カントが取り扱つた空間は飽くまでも概念的空間である。何則カントは空間を少くとも先驗感性論に於ては幾何學(ユークリッド)に關してのみ論じて居り、而も幾何學に關する空間は概念的空間であるからである。然しかゝる概念的空間を究明するに當つて何故彼が空間の概念であることを否定して直觀として究明したか。其の理由は恐らく次の如き點に存するのではないだらうか。即ち既にコエンも指摘して居る樣に、カントが思惟に對して直觀の所與を置いた偏見と、而して幾何學的命題が凡て綜合的である處に於て綜合的を直ちに直觀的と同一視したこと、及び空間を純粹に外延的に見て外延上一なる空

間は、概念が自己の下に種species を包攝するに對して、中に無限の部分空間を含むものであることに於てのみ其れを理解した點、即ち空間を外延的量の純粹形象として抽象的に考へた事等がカントをして空間を直觀と究明せしめたものゝ樣に思はれる。然し乍ら翻つて觀れば空間は外延上一なるものとして自己の中に無限の部分空間を含むものと考へられると共に、又點・線・面・立體等の概念の無限の可能性として其れ等の根柢に存する限り概念であると考へられねばならないであらう。蓋し概念とは存在の無限の可能性である。謂はゞ空間が外延上直觀的表象と見られるに反して可能性の上からは其れは飽くまでも概念と考へられねばならないと云ふことになる。夫れ故に勿論カントが外延上空間を直觀と究明したことは首肯されるであらうが、少くもカントが幾何學を以て外的現象を規定する一つのメトーデの如く解釋せる限り、(Kant, Prolegomena, Anmerkg., I. S. 41, Herausg. von K. Vorländer.) 空間は又外的現象の基に在つて其れを可能ならしめる働として概念的と考へられるのが至當ではないだらうか。恐らく斯樣に解することに依つて、空間の延長性も現象を可能ならしめる無限の可能性として即ち內包

的全體としての空間として其れが概念と考へられても何らの矛盾を齎さないであらう。

斯く空間を表現的と概念的とに區別することに依つて此處に空間の問題を限定した。而も空間が外延的に見られることに依つて直觀性を有し、內包的謂はゞ可能性に關して見る時其れは又概念性を有するものと考へられることによつて空間の理解の二重あることを明かにした。前者に依つて理解したのは言ふまでも無くカントであり、後者に於て空間の究明を徹底せしめたのがコエンであると思ふ。然し二重の理解はあるものゝ純粹なる先驗論理の立場に於ては其の理解も一に徹底せしめられることが要求されねばならない。純粹なる先驗論理の立場に於ては實に、一切の非論理的な要素は排除訂正せられて、一切が純粹思惟のコスモスに統一せられねばならない。

カントの理解

數學的經驗論の立場から到底企及し得ざる幾何學の論理的基礎付けを其の先

驗論の立場から果したのは言ふ迄もなくカントである。カントはこの幾何學の基礎付けの問題に於て空間の概念を取り扱つた。カントに依れば幾何學は「空間の性質を綜合的に而も先天的に規定する學」である(Kant, K. d. r. V., S. 40)。斯くカントは幾何學を定義して、然らば「空間に關する斯る認識が可能なる爲めには空間表象とは一體如何なるものであるか」を問ふた(ibid.)。この結論は既に「形而上學的究明」に依つて表示されて居る如く(Kant, K. d. r. V., S. 37 B)空間とは「物一般の關係の論證的概念」ではなくして「純粹直觀」であると云ふことである(S. 39)。然しカントの形而上學的究明に於ける空間の定義は空間概念を唯先天的に與へられたものとして其れに屬する明瞭なる表象を示したに過ぎないもので、空間を對象一般の認識の仕方に關する一切の認識に關して、即ち先驗的に究明したものではない。カントの空間論は全幾何學が含む先天的綜合命題の基礎付けに關して、即ち其の命題の原理として存在する事の證明に於て論究されて居るものである(註一)。夫れ故に空間概念の形而上學的究明は其の先驗的究明に對する豫備として表示されたものと見ることが出來る。かくてカントに於ける空間問題の重要なるもの

は其の先驗的究明に於て存する。即ち空間本來の表象と共に、其れが先天的綜合命題の原理としての究明、及び其の原理としての空間の認識等が重要なる問題を成して居るものである。

扨て幾何學の基礎付けに關するカントの論究は大體次の樣である。元來カントの幾何學の基礎付けの問題は直接に先天的綜合判斷の基礎付けに關係して居る (vgl. Kant, K. d. r. V., Einleitung V.)。カントに依れば幾何學は數學の一部門として之れのみが對象を直觀(先天的な而も經驗的に非ざる純粹な直觀)に表はし得るものである (vgl. Prolegomena § 7.)。(例へば「直線は二點間の最短距離なり」(Kant, K. d. r. V., S. 16)「二直線によつて如何なる空間も圍まれぬ、從つて如何なる圓形も成立せず」、「三直線に依つて一つの圓形は可能なり」(S. 65)。カントに依ればこれ等の命題は凡て概念の分析に依つては生ぜず、凡て直觀的にのみ可能である)。處が直觀なるものは對象との直接の表象、即ち對象の直觀として、(S. 41) 感性に依つてのみ我々に與へられるものであるが故に、幾何學に於ける凡ての命題も亦感性に依つて與へられ、而して其れに基くものと考へられる。即ち直觀にのみ表は

し得ると云ふ事は此處に於て直觀に基くと云ふ事になる。然し直觀には其の中に感覺に屬するものを含む經驗的直觀と、斯るものを全く含まざる純粹なる直觀とが存するが、元來經驗なるものは、カントの先驗哲學が教ふる樣に、如何なる場合にも認識の嚴密なる普遍性及び絕對的必然性を與ふるものでなく、單なる比較的の普遍性或は蓋然的な必然性を與ふるに過ぎないもので、之を與ふるものは先天的判斷のみである(Kant, K. d. r. V., Einleitung II)。然るに幾何學の一切の命題は既に述べた如く直觀に基き、且つ「先天的綜合的で必然的確實性を以て認識せらる」(S. 64)故に、幾何學の賴り基く處のものは明かに先天的純粹直觀でなければならない。斯くて幾何學は純粹直觀を其の原理として有すると云ふことに依つて其の可能性は理解されるものと考へた(S. 41)。この純粹直觀が幾何學にとつては空間の純粹直觀でなければならないことは言ふまでもない。何則幾何學は空間及び空間の種々なる性質を基礎として居るものであるから(Prolegomena, Anmerkg. I, S. 41)。斯樣なカントの論からすれば幾何學と空間との關係は先天的綜合態と其の原理との關係であつて、空間は幾何學に對して先天的なる基礎として與へられて

居ると云ふ事になる。然しこの空間が純粹直觀としての空間でなくして經驗的な空間であつた場合には、幾何學は外的現象を規定する處のものであるが故に事情は全く反して、却つて幾何學が空間の方法的原理と看做される事になるであらう。夫れ故に幾何學は一切の外的現象に對する一つのメトーデと考へられるだらう(vgl. Cohen, Logik der reinen Erkenntnis, III. Aufl., S. 189)。外的現象は對象の表象一般として、表象が外感に從屬する限りに於てそれは外的現象と呼ばれるのである(Kant, K. d. r. V., S. 378)。この外感の直觀は即ち空間であつて、これが外的現象の可能の基礎をなすものである限り、空間は方法的存在として全く單なる內的な表象の仕方であるに過ぎないものである(ibid.)。表象の仕方は表象受容の仕方として全く主觀の形式的性質である。斯樣に考へれば其れが主觀に存することは明かであつて從つて空間は外感一般の形式と看做されることになる(s. 41)。

扨てカントの認識論に從へば、對象は現象として現はれた處のものである。換言すれば、直觀に依つて與へられたものが思惟に依つて構成されたものである。然るにカントは現はれるもの無しに現象があると云ふことは不合理なことであ

ると考へて(K, d. r. V., Vorrede z. II. Aufl., S. XXVII)、現象の根柢にDing an sichの如き原因を置いたが故に、斯くてこの獨斷的許容物の爲めに空間の究明に於て「先の概念からの歸結」(S. 42. f)として更に空間に對する誤解を解かねばならなかつた。斯れに依れば空間は決してDing an sichの如きものでなく又其の表象はDing an sichに屬する性質でもなく、更にはDing an sich相互の關係でもなくして外感に於ける一切現象の形式に過ぎないものである(S.42)。蓋し空間が外感に於ける一切現象の形式に過ぎない所以は先天的に直觀する能力たる感性に對するDing an sichの關係に屬する規定である所に存する(Prolegomena, § 11)。更にカントは空間を究明して其れは外的直觀の單なる形式であつて、決して外的に直觀せられ得る處の現實的對象でも無ければ又現象の關係Correlatumでもなくして現象の形式に過ぎない」(S.460)と言つて居る。蓋し現象とは既に空間(外感一般の形式)に依つて或る關係に整頓せられたものである。斯樣にカントは其の先驗感性論に於て純認識論的な立場からライプニッツが空間をBeziehung(Raport)或はOrdnungの如き一般概念としてのAbstructumと見た(Leibniz, S. 54, 134, 151-152, Philosophische

Werke, I. Band, Philos. Bibliotek, Band 107) ことを否定して、其れは純粹直觀でなければならないことを形而上學的究明に於て示した(註二)。而して更に其れを先驗的に究明して空間を幾何學の可能の原理として示したことは、空間を方法的に徹せしめたものと云ふことが出來るであらう。斯樣に空間を方法的に觀ることに依つてのみ空間が先天性 Apriorität を有つことも亦理解し得るものである。而して空間が先天性を有つものとして現象構成の仕方(對象に依つて觸發される仕方)である限り空間は其れ自身メトーデと看做され得るであらう。

扨て先驗感性論に於てカントが理解した空間なるものは純粹直觀として全く外感一般の形式に過ぎないものであるが、若し空間が單に形式のみのものであつたならば其れ自身は決して何らの對象をも構成し得るものではない。何則カント自らも言つて居る樣に、對象が構成せられる爲めには、即ち對象が認識せられる爲めには、感性に依つて與へられた直觀の多樣が、思惟の自發性に於ける構想力 Einbildungskraft に依つて綜合され、且つ此の綜合が概念に還元されねばならない。乃ち多樣の綜合がカテゴリーの規定を受けねば對象は構成せられない、從つて眞の

認識は生じない(K. d. r. V., S. 102-104)。夫れ故に空間が對象として構成せられる爲めにはそれが思惟に依つて綜合され且つカテゴリーの規定を受けねばならない。若し然うで無かつたならば空間は決して認識とはならない。カントも「外的直觀の單なる形式たる空間は未だ何等の認識でもない。夫れは只可能的認識に直觀の多樣を先天的に與ふるのみである。我々が空間に於て或る一つの線を認識する爲めには之れを引いて見なければならない。即ち與へられた多樣の一定の結合を綜合的に成立せしめなければならない。而してこの行爲の統一性は同時に(線の概念に於ける)意識の統一性であつて而も之れに依つて一定の空間としての對象が認識されるのである」(S. 137-138)と言つて居る樣に、先驗感性論に於て決定せしめられた純粹直觀としての空間は、其れが飽くまでも單なる感性の形式である限り何らの對象をも構成しない。尤もカントは多樣の綜合をなす構想力の綜合を先驗的性論に於て直觀能力たる感性に與へて居る。即ち感性は多樣の表象の統一を自己の中に有するものとして從つて感性の形式たる空間にも直觀の統一が屬するものとして居る(S. 160-161, Anmerkg.)。之れは恐らくカントが感性

論に於て感性を全然思惟する能力である悟性から融離せしめて論究した結果として、感性に表象の統一を屬せしめたもので、空間に於ける直觀の統一も、感性の形式として其の形式に統一の意義を與へんとした結果、斯る冒險を敢て爲したものと看做されざるを得ない。然し感性が全認識能力の一として他の悟性を俟つて初めて眞の意味が生ずる限り、感性論を經て悟性論に入つた場合には、以前に感性に託した綜合の働は直ちに悟性に返却せられねばならない。即ち綜合統一の働は全く思惟にのみ屬せしめねばならない。カントが全認識論に於て感性に綜合の働を承認したことは所與の概念の深い先入見の結果とも考へられる。(註三)。

一つの線を引いて見ると云ふことは線なる對象に構成することである。カントは上に述べた所與の先入見に依つて、引いて見る働其のもの即ち形式的直觀に其の對象構成の統一を屬せしめて居るが(註四)、直觀の表象を對象に構成する即ち對象たらしめるのは意識の統一即ち構想力の先驗的綜合の働であつて形式的直觀ではない。意識の統一は「一切の直觀が我々に對して對象となる爲めに從はねばならない處の認識の客觀的條件である」(S. 138)。夫れ故に對象に構成せられる

空間即ち對象として表象せらる空間は、意識の統一に依つて形象的に綜合せられて始めて認識となるのである。而もこの意識の統一を俟つてこそ其の空間の價値(普遍妥當性)も保證せられることになるのである。斯くして「幾何學に於て實際必要である樣に對象として表象せられた空間は直觀の單なる形式以上のもの即ち感性の形式に從つて與へられた多樣が直觀的表象へ統一せられることを含んで居る」(S. 160, Anmerkg.)。即ち多樣一般の表象の統一としての表象である。幾何學的空間とは對象に表象せられた空間として正に斯くの如きものを意味する。かゝる幾何學的空間は、カントの見解を問ひ詰めれば、其れが構想力の形象的綜合 Synthesis Specios (S. 151) の所產である限り、直觀と概念とを結合媒介すると考へられて居る Schema となる。蓋しカントに依れば Schema とは「其れ自身は必然的に構想力の所產であり」而も「構想力の目指す所は個々の直觀ではなくして感性の限定に於ける統一である故に Schema は心象とは嚴密に區別せられるべきものである」(S. 179)。換言すれば Schema とは個々の直觀の根柢にあつて直觀の多樣を綜合する仕方一般である。依つて幾何學的空間は Schema として個々の空間形象を綜合す

る處の仕方一般、謂はゞ規則一般に外ならない。一切の空間形象が可能なる爲めにはそれは空間中に於てゞあるから、一切の形象は常に空間の綜合規則に準じて成立する。從つて幾何學的形象の一たる三角形も其れが可能なる爲めには空間の綜合規則に規つて成立せしめられるのである。然し三角形も空間に關して構想力の綜合の一つの規則を意味する限り、個々の三角形(例へば直角三角形、或は種々なる不等邊三角形等)に對する綜合の規則と考へられてschemaとして妥當せねばならない。

上に述べた樣に幾何學的空間はschemaと考へられる限り、生產的構想力の綜合の先天的所產である。構想力の綜合は多樣なるものゝ綜合として其の綜合の過程は繼次的(順次的)でなければならない。蓋しカントに依れば多樣なるものが綜合せられる限り同種的であり(S. 203)、同種的多樣の綜合は量であつて而も量は幾何學の基礎をなすものとして正に外延的量である(ibid.)。然るに又外延的量とは「部分から部分への繼次的綜合」を意味するものでなければならない(S. 204)。それで幾何學的空間形象の生成は此の生產的構想力の繼次的綜合に依つて始めて表

象となり、直觀せられるのである。即ち幾何學はかゝる綜合を基礎とする。「延長の學としての幾何學は其の公理と共に形象の生産に於ける生産的構想力の繼次的綜合に基く」(ibid.)(註五)。夫れ故に「直觀の公理」(S. 202)に從へば幾何學的空間は量の純粹綜合の表象として謂はゞ意識の綜合統一に依つて可能ならしめられる「連續量」quanta continua である、即ち「空間は數多の空間(點)より成る」(S. 211)ものゝ純粹表象である。此處に於て幾何學的空間は「量の概念に於て考へられる處の統一」(S. 203)と看做される限り其れは最早純粹直觀としてゞはなく純粹概念と考へられねばならないであらう。カントも空間に於ける此の多樣の「綜合統一は若し空間の形式を抽象すれば其の場を悟性に於て有す、而して直觀一般に於ける同質的なものの綜合のカテゴリー即量 Grösse のカテゴリーである」(S. 162)と言つて居る所から、空間的統一を論理的に徹底して解釋する處に純粹概念としての量のカテゴリーが空間に關係して居ることを認あて居るものと見ることが出來るであらう。

カントが外感の單なる形式としての空間から、其の認識の論に於て更に Schema としての空間を認めたことは、空間を餘程概念的に近接せしめて見たものと言ひ

得るであらうが然しSchemaは何處までも非論理的な要素である以上、その見解は先驗論理的に徹底せるものと言ふことは出來ないであらう。カントがSchemaとしての空間から更に突き進んで純粹概念としての空間を明瞭に承認し得なかつた事は、恐らく彼の二元論的解釋に依る所與の先入見が此處にも關係した結果である樣に思はれる。先驗論理の立場に立つて空間を徹底せしめる時、其れは如何に解釋されねばならないか。「外感の前にある一切の量 quantorum の純粹形象は空間である」(S. 182)と云つても、カントの見解からすれば其の純粹形象は純粹所與性としての非論理的なSchema以上の何物でもない。斯くして余は此處に先驗論理の立場に於て空間が如何に解釋されるかをコエンに就いて見ることにする。

註一、カントの前批判期にける空間の論究は全く形而上學的究明の外に出なかつた。即ちニュートンの力學に依つて與へられた空間の問題を、形而上學的な考察によつて論究したものである。尤も一七七〇年の論文に於て空間を既に批判期に於ける先驗感性論の立場の見解と同樣に解釋しては居るが、矢張それは形而上學的であつた。總じてカントの空間論はリールも指摘して居る樣にニュートンから導かれたものである。「空間論に於てはニュートンがカントの先驅者であり、因果論に於ては其

れはヒュームである。」(Riel, Philosophische Kriticismus I. Band, S. 273)

註二、形而上學的究明の三、即ち「空間は物一般の關係の一般的概念ではなくして純粋直觀である」と(K. d. r. V., S. 39)と云ふ命題は明かにライプニッツの空間に對する見解の否定と見ることが出來るであらう。

註三、コエンは此の所與の概念が思惟の純粋性を侵すものとして之れを排し、先驗哲學を徹しめる爲めには所與を課題として與へられる即ち Aufgegeben に置換せしめられねばならないことを主張して居る。(Cohen, Logik der reinen Erkenntnis, III. Aufl., S. 28, 151)

註四、「形式的直觀は表象の統一を與へる」(Kant, K. d. r. V., S. 160-161, Anmerkg.)

註五、カントが時間を以て「一切現象の先天的制約」(K. d. r. V., S. 50)としたことは此の場合にも明かに示されてゐる。即ち空間形象の構成に於て時間は間接に其れを制約してゐる。

コエンの理解

コエンの空間論は勿論彼れ自身の純粋認識の立場に於て發展せしめられ、且つ解釋せられたものではあるが、元々コエンの哲學がカントの哲學に依つて發展したものである處から、カントの空間論とも離れざる關係に在ることは誰しも認め

ることであらう。コエン自身も述べて居る樣に、彼はカント哲學に意識的に敎はることを、哲學の新らしい仕事に際しての眞なる哲學的創造力の先件であるとさへ考へた。而して彼はカントに於ける種々なる概念を訂正し矛盾なからしめて、斯くて自己の哲學の途を展いたのであつた。(Kants Theorie der Erfahrung, verlag bei B. Cassirer, Berlin, 1925, S. 564)。コエンがカント哲學に於ける種々なる概念の中最も根本的なる欠點として指摘したのは純粹直觀の概念であつた。カントに於ては此の純粹直觀なしには思惟に對して如何なるものと雖ども考へられず、從つて認識は凡て空虛なものとなる。「內容無き思惟は空虛であり、概念無き直觀は盲目である」(K. d. r. V., S. 75)。然るにコエンは純粹直觀を思惟に先行するものと考へる事は「思惟が自己以外のある物に其の發端を有する」(Logik der reinen Erkenntnis, III. Aufl., S.12)。と云ふことになり、之れを許容することに依つて思惟は自己の獨立性を侵されるものと考へて之れに反對した。コエンに依れば思惟は本來創造的であり生產的Erzeugendである。生產と云ふことは結合・綜合以外に思惟の中心的意義をなすものである(ibid. S. 28)。この生產なる働は思惟自身の働の目的であ

り「而も生産は統一の生産である」(ibid. S. 29)限り一切の統一の根源は亦思惟にあると考へられる。然るに「思惟は自己以外に何らの根源をも有しない」(S. 13)故にカントの考へた様な思惟以外にある純粋所與としての純粋直觀も、コエンの立場からすれば凡て純粋思惟から來るものと解釋されねばならない。即ち純粋性に於て直觀と思惟との區別は除かれる。「純粋性は唯一種のみでなければならない」(S. 150)。コエンは純粋性を「方法的附帶」methodischer Band と考へ、こゝに於てのみ兩者は相一致すべきことを Kants Theorie der Erfahrung に於て說いた(S. 565)。「純粋性は方法的附帶である、其れは純粋直觀の形式と純粋思惟の形式とを體系的に一致せしめ、體系的項として同格ならしめ、且つ其の方法的差異を除く」(ibid.)。斯くてカントの許容した純粋直觀はコエンに於て方法的に純粋思惟と一致せしめられ、純粋性は認識の生産を意味する樣になつて(Logik d. r. Erkenntnis, S. 150)、此處にカントが認めた如き所與の概念は否定され、其れは、只問題 Aufgabe を構成する爲めの條件となり(S. 82)、斯くて思惟が自己の內面的發展に際して自ら見出し得るものゝみが與へられたものとして思惟に妥當する樣になつた(ibid.)。此處に於て純

粹所與性としての空間はカントが考へた如き純粹直觀の考から訂正されねばならなくなつたのである。

既に述べた樣にコエンにとつては純粹思惟に對しては何ものも又如何なる方面からも與へられると云ふことは出來ない(S.192)。唯思惟が自ら見出し得たもののみを與へられたものとして認識の生産に向ふ。夫れ故にカントが思惟の綜合統一に對して外から與へられると考へた直觀の多樣の如きものも、コエンからすれば思惟に對して外から與へられたものではなくして、思惟が其の生産的發展に於て、時間のカテゴリーに依つて生産した數多性の Einheiten に外ならない。然し「時間が純粹思惟のコスモスを感覺や表象の渾沌界から數に於て生産するけれども、尙數の體系と見られる自然(存在)は單なる內成分 Innengehalt に過ぎないものである。「それは內容生産の方法的準備である」。內容即ち自然の內容が問題となる爲めには、先づ數に外なる性質が附加されねばならない(S.187)。かくしてコエンにとつては方法的に自然と數とを區別するものは、幾何學と算術とを區別する當のものであつて、これが即ちカテゴリーとしての空間であることになる。「この新ら

しいカテゴリーは空間である」(S. 188)。コエンの空間問題はカントが純粋直觀として發展せしめたに對して、純粋認識の立場から空間をカテゴリーと考へて發展せしめた。

扨てコエンにあつては空間の問題は數學の判斷に於ける認識の發展の一段階に於て論ぜられてゐる。數學の判斷は純粋思惟が質の判斷即ち「思惟法則の判斷」に於て基礎付けられた後に、必然的に發展すべき「建設」の段階謂はば量の判斷である(S. 121)。質の判斷に於て純粋思惟は其の根本的權利が確立され「量の判斷に於て其の「形象的種類」たる數學の思惟が內容的に建設されるのである。「質は量に進展する。純粋思惟の普遍的根本權利が確立された後には純粋思惟の形象的種類即ち數學の思惟が始まらねばならない」(ibid.)。

コエンによれば數のカテゴリーは數學的對象の生產に際しての手段として、之れは其の對象に實在性としての統一即ちEinheitのみを與へる。然しこの Einheit は內に能產力を含む實在性ではあるが、單に思惟された或る物であるに過ぎない。即ち絕對的實在性としての一であり、多の一に非ざる絕對的統一であるが故に、自

然の內容生產に於ける方法的準備たるEinheitenではあり得ない。統一の一から數多性に於ける多の一Einheitenが生產せられるのは時間のカテゴリーに依らねばならない。然し時間は其のものとしては豫料Anticipationのカテゴリーとして(S. 154)內容としてのEinheitenを生產するものではないが、時間本來の所爲として現はれる十號に於て、時間其のものに依るが如くEinheitenが思惟され生產されるものなのである。(S.159)。Einheitenは數多性のカテゴリーに依つて生產されたもので其れは最早絕對的統一としてのEinheitではなくして多の一である。此の多の一がEinheitでない限り、多の一は自同的唯一のものではない。若し然らざれば多の一は數多性に非ずして唯一の統一としての一に過ぎないからである。其れが數多性に於けるEinheitenたる限り、其れは自同性に於てあると共に又差異性に於てもなければならない。この差異性は只Einheitenの定立の順序の差異のみでなければならない。順序は時間關係として、かくて「數多性のカテゴリーは時間のカテゴリーの助力又は協同を必要とする」(S. 160)ことになる。然るに時間のカテゴリーは數Zahlenの生產に於ては十號として現はれる。2は多の一たる1の

の綜合の結果として生ずる。此の綜合は十號の生産作用に基くのである。從つて數の系列は十號を豫想するが故に、數の生成には時間を豫想すると云ひ得るのである。斯くして時間は數多性の Einheiten を只數の體系として與へると云ふことが出來る。然るに又數多性にあつては何ら一定の完結と云ふことは問題とならない(S.178)。Einheiten は數多性の目的又は特殊内容の爲めの單なる純粹手段に過ぎないものである(S.176)。この Einheiten をして一定に完結せられたる系列たらしめ、綜體に達せしめる爲めには更に新らしいカテゴリーが必要である。これが即ち空間のカテゴリーなのである。

元よりコエンにあつては思惟と存在との關係が問題であつた。思惟が質の判斷に於て其の基礎が確かめられても尙存在は單なる可能性に止まつて居た。然るに質の判斷から量の判斷即ち數學の判斷に至つて純粹思惟は存在の内容的建設に進んだ。即ち實在性の判斷に於て存在は絶對的統一としての Einheit に達し、Einheit は數多性の判斷に於て Einheiten としての内成分を得た。然るにこの内成分は單に存在の内 Innere を形成するに過ぎないものである。而も存在は認識の

對象としては其の内が外のものとならねばならない。「自然の問題はこの内に對する外の相關々係を要求する」(S. 188)。コエンにとつては何物と雖も思惟に對して與へられることはなく、凡ては思惟に依つて生産されたものであるが故に、内に對する外も思惟が生産したものでなければならない。然るに外のものとなることは空間的となることであつて、この外のものとすることが元來空間に含まれてゐると考へられて、斯くして空間的となつた存在即ち自然は、思惟の所産として思惟と存在との同一性も亦保證せられることが出來るのである。「存在は思惟に對して外のものとならねばならない。然し其の爲めに思惟と存在との同一性は侵害されはしない。何則この外を生産したものは思惟自身に外ならないからである」(ibid.)。而して「この生産に依つて思惟は自ら自然の思惟となり、存在となる。從つて空間はカテゴリーである」(ibid.)。以上の樣に、コエンにとつては認識の過程に於て内が外に生産されるのは、この空間のカテゴリーに依るのであるが、これに依つて外たらしめられた存在即自然は經驗論の解釋する樣な感覺の所産たるものではなくして、純粹に思惟された綜體即ち數多性の Einheiten の綜體性に於ける完

結された系列、謂はゞ學的自然である。夫れ故にコエンの空間の問題が數學的自然科學の爲めの幾何學の意義の中に存在することも充分に理解される(S. 191)。

然し此處に謂ふ幾何學とは解析幾何學である。何則コエンの自然生産に於ては數から發展して生ずる自然は、數の無限的綜體と考へられて居るからである。從つてコエンの問題となる空間は解析幾何學に於ける空間即ち數學的空間(純粹幾何學の對象たる純性質的空間に對す)であつて、斯く考へてこそ空間は數多性の Einheiten たる內を外としての完結せる系列に變ずるカテゴリーとして純粹思惟の中に求められるのである。「空間が……內を外に變ずる限り、其の特有の方法は純粹思惟の中に探し求められねばならない」(S. 189-190)。

コエンは斯く空間を以て內を外に變ずるカテゴリーとして考へることに依つて、經驗論の陷る循還論を免れ得るものと信じた。事實經驗論からすれば空間は感覺又は感覺の所產であると考へられる故に循還論に陷るのである。何則感覺は既に先に空間を豫想して居るものであるからである。「經驗論者は思惟を表象とする、而も彼は感覺の中に外を先に定立して居ることに思ひ至つて居らない(S.

190)。

コエンはこれに依つて又カントに於けるが如き空間の純粹直觀たることを否定したのである。「既に時間は數多性の Einheiten を生產し從つて內容を純粹思惟に於て生產した。若し然らざれば其の內容も一種の所與と考へられる。夫れ故に此の時間は其の所產と共に一つの前提と考へられ、而して其の前提を空間が統一するのである。從つて空間自身を純粹直觀と見る見解は至當ではない。……總體性の判斷に於ては空間はカテゴリーとなる可きである」(S.193)。斯くして彼は空間を時間の完成として考察し、而も其處に於て兩者の區別の存することを更に論じた。

本來時間に於ては點(瞬間)は並存するものでなく繼起するものである。從つて時間に依つて生ずる系列は、未來なるものに近接して往く去往者が移り往く經過に依つて示される。即ち時間が經過する系列は止まるものでなくして、永遠の去來であり、絕えざる經過、變化である。絕えざる經過は絕えず未來を豫料するが、この豫料は時間の特性である。夫れ故に時間のみがあつて空間が無ければ「內容の

素質」Anlage zum Inhalt は生じても「內容自身」Inhalt selbst とはならない。何則時間は其れ自身は未完のものであるからである。「豫料のみが時間中に存する、而して後方 Rückwärts は前方 Vorwärts への相關に於てのみ現はれる。時間の領域には、如何なるものも留存せずして絕えず去來が置換するのみである。然し何ものも留まらないが、只一つの生產方法のみが留まる。時間が働けば內容の素質が作られるが內容自身は形成せられない」(S.193) とコエンは言つて居る。斯樣に自身完結せざる全體としての時間の缺を補ふものが實に空間のカテゴリーなのである。空間は變化するものを取り上げ、而して未來に生じ過去に消へ行く Einheiten を留まらすものである。この過去と未來との接合の能力は、時間が豫料を其の特性とするに對して空間の特性である。「空間はこの Einheiten を確保する、……空間の綜體性は Einheiten を凡て連接する。並存 Beisammen と言ふよりは寧ろ共存 Zusammen は空間に專らある處の、又空間が果す處の働である」(S. 194)。從つてコエンにとつては相互に連接する形式たる空間は感覺に對立する論理的見解に於て考へられたものである。何則「感覺は孤立的であり……反之空間は共存を意味す

る(ibid.)からである。斯くてコエンの論からすれば空間は時間と共に過程の傾向に於て感覺と對立するが(註一)、而も空間と時間とは、亦其の過程に於て全く相異る働を爲すものである。即ち時間は Einheiten を生ぜしめるが其れに於ては Einheiten は自ら並存し得ない。時間に於ては只去來の働があるのみである。この Einheiten を保留せしめ相互に接合せしめる處のもの即ち並存に在らしめるのは空間に頼らねばならない。空間は完成せる外のものたらしめる働をなすものであるが故に、斯くて又自然科學の根柢をなすものと言ふ事が出來るのである。

斯樣にコエンにあつては並存と外のものたらしめることの二つの働によつて空間が究明された。この二つの働は空間に於てのみ問題となるものである故に、又同一のものであらねばならない。かくて「並存は外を意味する」(S.195)、「並存は其れ自身外である。並存の保留其れ自身は外へ投げることである。空間に於て又空間による以外の並存も、並存の保留も存しない」(S.196)とコエンは述べて居る。若しも此の並存を同時と云ふ形式から考へて時間に共存の性質を歸する者があるとしたならば、それは空間を時間に置換して觀た事に過ぎない。時間は飽くま

でも繼起的であつて並存的ではない。コエンは次の如く説明して居る。「若し人が同時存在 Zugleichsein の形式の名稱の下に並存を時間に歸せしめるならば、それは空間の飜譯である。時間に在るものは變化のみである。即ち單なる經過 Vorbei であつて並存ではない」(ibid.)。

此處に於て空間は外たらしめる働に於て、單なる經過を意味する時間と嚴密に區別せられる。Einheiten を保留し、連接して總體性としての Einheit を生産せしめるカテゴリーとして、此處に全く、カントに於ける如き純粹所與性としての空間が純粹論理的に訂正せられたと云ふことが出來るであらう。

先驗論理の立場から空間を觀る時、我々はカントならずコエンの見解に其の正當なる解釋を見出すであらう。恐らくコエンの如き見解に立つて空間を解する時、方法的空間に在ると見られる直觀性及び概念性の二重性も其の對立を消すであらう。何則純粹思惟は常に自己の基礎付から內容の建設生産に進み、其の無限の創造的生産過程に於て自ら課題を見出しつゝ其の課題の渾沌から統一を生産

する。されば外延上空間が一なるものとして直觀せられる、即ち空間が外延上直觀性であると言ふことも、總體性のEinheitとして生産された空間のカテゴリーが、再び純粹思惟の課題として考へられた時斯る直觀性を持つとせられるのであらう。然しかゝる直觀性にある空間も思惟の課題である以上未だ認識に統一せられざる渾沌、恐らくはコエンの言ふが如きMythos(註二)に於ける空間である。其れが認識せられる、即ち純粹思惟に生産せられる限りは學(註二)の空間であり、學の空間である限り其れは概念性のみを有つものでなければならない。

註一、時間は內容を內から外に移すが、感覺からすれば寧ろ外から內に移すことになる。(Logik d. r. Erkenntnis, S. 464)

註二、コエンに依れば思惟に依つて統一せられざるものは單なる課題Aufgabeとして主觀的直觀的であるに反して、それに依つて統一せられたものは實在的である。蓋し實在は思惟の所產として兩者は自同的である。それてコエンは前者を意識性Bewusstheitとして Mythologisch であるとし、後者を意識Bewusstseinとして wissenschaftlich であると考へ、一切の對象が統一の對象たる限りはこのBewusstseinに於て統一されたものであり、從つて wissenschaftlich であつて概念性のみを有つものである。「意識性は神話であり、意識は學である」(「Logik d. r. E., S. 424.」)。